法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-03

小鹿野歌舞伎の現在

HIRANOI, Chieko / 平野井, ちえ子

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
6
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
23
(終了ページ / End Page)
36
(発行年 / Year)
2006-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004499

Hosei University Repository

小鹿野歌舞伎の現在

平野井　ちえ子

1．小鹿野歌舞伎との出会い

最初の出会いは、2004年10月２日、奈倉妙見宮の女歌舞伎だった。研究というよりも、在外研究中の一時帰国で、日本のふるさと旅情に浸りたかったのだ。池袋から西武特急レッドアロー号で約80分の西武秩父駅から、さらにバスで40分～50分の旅程である。東京で生まれ育った筆者にとっては、戸惑うほど田舎であった。たとえば、祭りがはねた後の帰途だが、上りのレッドアロー号の最終が平日で21時25分発のところ、土曜のため20時25分発が最終。それに間に合うためには、７時30分ごろ祭りのクライマックスの女歌舞伎を半ばにして発たねばならない。当初、そのつもりで自分でタクシーを予約しておいたら、いかにも人の良さそうな地元のおじさま方が、最終の特急は21時25分発だから、最後まで歌舞伎を見て誰かに送ってもらえばいいよ、と口々におっしゃる。地元の人の情報だから間違いないのかな、と気楽に信じたら、ひどい目にあった。やはり、最終は20時25分。結局西武秩父から飯能までタクシーに乗ることになり、旅館に一泊できるくらいの料金を支払った。しかも、女歌舞伎を見に行ったつもりだったのに、これがなかなか始まらない。ちびっ子の合唱やらおじさんのカラオケ大会やらが目白押しで、出し物と出番は決まっているものの、タイムスケジュールは無いに等しい。困惑顔の筆者を見て、町役場の山本正実さんが、歌舞伎に関わる町民のみなさんをご紹介下さったが、その都度うまい地酒をすすめられるので、初めての土地での緊張もあり、つい過ごしてしまった。正直のところ、このときの歌舞伎で覚えているのは、子供歌舞伎の舞台の最中に「おしっこ！」と叫んだかわいらしい捕り手さんをどこかのおじさんが軽々と脇に抱えて飛ぶように厠へ走ったこと、女歌舞伎の静御前が大変美しい人（写真１）で、彼女が楽屋で支度をととのえると、カメラマンが一斉に取り囲んでシャッターをきっていたこと、くらいである。結局二日酔いで苦しんで、もう二度と行くまい、と自分に誓った。

写真１　静御前とファンの皆さん

ところが、その後客員研究員として滞在していたオックスフォードに戻ると、ちょうど国際演劇学会（IFTR）が、2005年の大会の研究発表を募集しており、大会テーマは、Citizen Artist—Theatre, Culture & Community—とある。たしかにここ数年、地域の芸能や文化政策というテーマは注目されている。建設的な学究意欲からか自虐的なやけくそからか、この機会に、これまで演劇研究者として手のつかなかった地芝居とのつきあいを始めることにしたのである。

2．小鹿野町って、どんなところ？

冷静になって考えると、やはりせっかく初めての土地を訪れるのであれば、時間的余裕をたっぷりとり、交通の便の悪さも祭り気分の時間感覚も、それ自体をその土地の属性として享受する心で行くべきだった。忙しい日常の中で時

Hosei University Repository

間をとって出かけると、つい予定通りに行かないことにいらいらするが、そんなよそ者丸出しの姿勢では、来られる方もいい迷惑である。

2度目に小鹿野を訪れたのは、2005年4月15日・16日の春祭りだった。4月上旬に在外研究から一時帰国したすぐ後のことである。今回は、前回の失敗に学び、美人女将と美味しい郷土料理で人気の旅館を予約し、余裕をもって出かけた。

まず、行きの道中で特筆すべきことは、特急で飯能を過ぎると景色が一気に山間の奥深い自然の景観に変わっていくことであり、西武秩父駅からタクシーではなくバスに乗って小鹿野に向かうと、時間は2倍かかるが、田畑や人家など人々の暮らしを垣間見ながら走るので、全く飽きることが無い。バスターミナルから見上げた武甲山の削られた山肌も（写真2）、かつて栄えたセメント産業の歴史を物語っている。バス通路のそこかしこに丸太が積み上げられており、町の85%が県立西秩父自然公園と呼ばれる山岳地帯の土地柄を思わせる。ちなみに、小鹿野歌舞伎で活躍する町民さんにも、建設業の方が多い。

写真2　バスターミナルから見上げた武甲山

江戸時代中期から養蚕で栄えた小鹿野町だが、1960年代頃から、養蚕専業農家から、養豚や米と園芸作物の栽培による兼業農家へと移り変わった。現在、当地の名物というと、豚の味噌漬け、とんかつ、牡丹鍋、馬刺し、鹿刺し、山菜の天ぷら、そして地酒である。また、土産の甘味はどこも似たり寄ったり、と思いきや、山芋を練りこんだ生地にマーガリンをはさんだ素朴な菓子が、ことのほか美味であった。先日テレビで某芸能人も絶賛していた品である（写真3）。2度目の訪問では、まず味覚から堪能し、美人女将の心配りに癒されて、余裕をもって取材ができた。

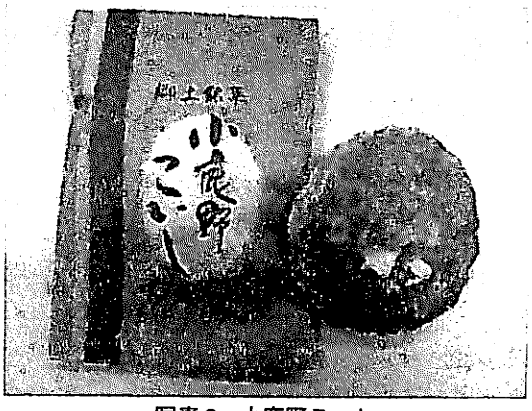

写真3　小鹿野こいし

最後に小鹿野を訪れたのは、2005年10月1日の奈倉妙見宮の祭りである。二日酔いで反省した2004年の同じ祭りから1年にわたり、祭りの当日のみならず、文化センターで資料を拝借したり、子供歌舞伎の稽古を見たり、と何度もこの地を訪れた。

そのたびに嬉しく思うのは、毎回必ず親しげに言葉をかけてくれる土地の人が増えていくことである。最初は、じーっとこちらを見ている。でも、話しかけてこない。会所に祭りのハナを出しても、「おねえさん、誰の紹介だい？」と言われてしまう。実は、こういう視線にも最初はかなり戸惑った。次に行ってもまだそんなことがあるだろうが、何度も足を運んで、気楽に芝居を語れる友が一人ずつ増えていくことが、今はとても楽しい。写真4は、奈倉妙見宮の会所。

3．小鹿野歌舞伎の歴史―初代坂東彦五郎から小鹿野歌舞伎保存会まで―

小鹿野歌舞伎の創始者は、下吉田村（現吉田町）井上出身の坂東彦五郎（？～1834）であると言われている。

およそ二世紀前の文化・文政期（1804～1830）のことである。江戸の大歌舞伎役者坂東三津五郎のもとで修業を積み、「坂東彦五郎」の名をも

Hosei University Repository

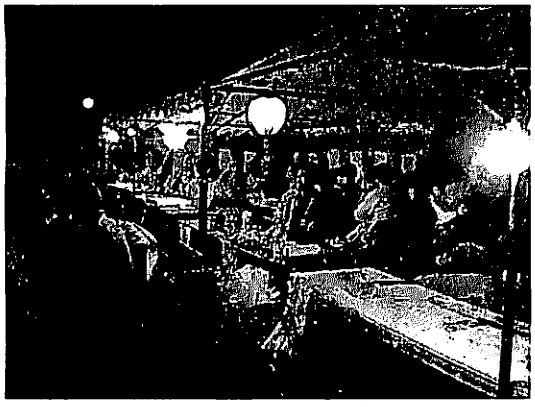

写真4　奈倉妙見宮の会所

らって帰郷、近所の若い衆に芝居を教えた。一応これが、小鹿野歌舞伎の始まりであるとされている。「後ろ面の彦五郎」と言われ、前後に面をつけて踊ると、身体の前後を錯覚させるほどの芸達者だったという伝説がある。

初代彦五郎の没後、弟子たちがそれぞれの村の名をつけた彦五郎を名乗り、後輩を指導するようになったが、その中から、勇佐座の創始者「音羽屋彦五郎」と飯田の師匠「喜熨屋彦五郎」が出て、この後、音羽屋は興行芝居の系統、喜熨屋は村芝居の師匠の系統として、二つの流派に分かれる。

音羽屋の興行芝居の系統は、この後二代目音羽屋彦五郎の創始した天王座を経て、明治・大正という小鹿野歌舞伎の繁栄期を支えた大和座へと引き継がれる。宿場町小鹿野が、養蚕業の隆盛を背景に、群馬から横浜へのシルクロードの拠点として栄えた時代である。大和座は、昭和初年まで約50年間続き、野上（長瀞町）の和泉座とともに、秩父歌舞伎の最盛期を担ったという。

その後大正期後半から、大和座・和泉座ともに衰退していく。合同して高砂座を創始するなど、興行上の努力は続いたが、戦争と映画の波は抗しがたく、昭和25年音羽屋の引退興行により、小鹿野歌舞伎の歴史は一つの危機を迎える。

昭和40年代に入り、大和座の流れをくむ人々により新大和座が結成され、老人ホームへの慰問興行や近隣への巡業などを皮切りに、小鹿野町内各地の祭りの奉納芝居や、小鹿野町郷土芸能大会での歌舞伎上演を担うようになった。

昭和48年、民俗文化財保護の気運高揚を受けて、新大和座と小鹿野5地区（津谷木、十六、上飯田、小鹿野、下小鹿野）の地芝居継承者が合同、小鹿野歌舞伎保存会の結成に至る。小鹿野歌舞伎保存会は、昭和52年に埼玉県指定無形民俗文化財の指定を受け、地域文化の継承と向上のため、歌舞伎上演を続けている。小鹿野で年に6回行なわれる定例歌舞伎公演は、うち5回が小鹿野町内5地域の団体による祭礼歌舞伎、他1回が小鹿野町文化センターによる郷土芸能祭である。

子供歌舞伎と女歌舞伎の存在も、小鹿野歌舞伎の特徴である。小鹿野の子供歌舞伎は、初代音羽屋彦五郎の時代に遡ると言われており、その全盛期は、大正7年～13年までの少女歌舞伎である。大和座の義太夫だった花柳楽寿が、5歳～17歳くらいまでの少女たちを指導し、「花柳楽寿子供歌舞伎一座」として人気を博した。現在の子供歌舞伎は、小鹿野歌舞伎保存会小鹿野部会の柴崎好一さんが、上二丁目の子供たちを中心に、自宅を稽古場に開放して、昭和62年に再開したものである。全国でも珍しい女歌舞伎は、かつては小鹿野歌舞伎保存会下小鹿野部会だった奈倉耕地の氏子によるものであり、昭和58年から田村静江さんを中心として始まった。これが筆者が2年連続出かけた奈倉の女歌舞伎であり、現在では「奈倉女歌舞伎の会」という独立した団体として活動を行なっている。

小鹿野町内5地域の歌舞伎は、各地区の氏子によるものだが、それ以外の市民も歌舞伎に参加できる場がある。それが、市民サークル「うぶ」である。平成14年、一般市民に幅広く歌舞伎への理解を求めるため、役場の山本正実さんの提案により、市民講座から発生した歌舞伎サークルである。伝統の小鹿野歌舞伎保存会に対し、身近な歌舞伎愛好会として、市民の文化活動の一端を支えている。写真5は、春祭りのお練りに参加する「うぶの会」会長の山口健司さんと小鹿野町文化センターの山本正実さん。二人ともこの地方の公務員です。

4．小鹿野歌舞伎隆盛の背景

関東山脈に囲まれた寒暖の厳しい秩父盆地。

Hosei University Repository

写真5「うぶ」会長の山口さんと文化センターの山本さん

こんな山奥になぜ歌舞伎が栄えたのだろうか？

小鹿野地方は、古くから上州・信州への交通の要所であり、江戸時代初期にはすでに市の立つ宿場町としての繁栄が見られたが、養蚕が盛んになると、よけいに商業上の拠点としての役割が大きくなり、賑やかな街並みとなっていった。絹を買い付けにくる京商人が、京都の文化を伝えたことは想像に難くない。しかも、この地域は、天領と旗本領が入り混じる江戸幕府の直轄地で、江戸と同じ武蔵国なので、通行手形もいらずに、江戸との行き来が円滑に行なわれ、江戸の文化も吸収しやすかった。

幕府の直轄地であることには、もう一つの利点がある。それは、農村歌舞伎を調べていると、幕府や藩による禁令に多く接することになるが、ここでは、村長レベルの統治であるため、他の地域では奢侈の象徴のように弾圧された農村歌舞伎への禁令の影響が弱かったことである。

養蚕は、その後とくに幕末～明治10年代にかけての経済的繁栄を支えた。イタリア・フランスへの輸出を目的とした、群馬から横浜にいたるシルクロードの拠点となったのである。

もちろん、経済的な豊かさや文化交流の地の利だけでは、地域文化の隆盛に十分でない。古きにあっては、前述の大和座に近いことで、指導者や衣裳・道具類を容易に調達できたことが、大きな特典になったことと考えられるし、現代では、「歌舞伎を中心としたまちづくり」を謳って、行政と小鹿野歌舞伎保存会各部会などの指導者との協力が、バランスよく実現していることを評価したい。

5．小鹿野歌舞伎の暦

小鹿野歌舞伎の年6回の定例公演は、以下の順序で行なわれる。（日付は平成17年のもの。）

3月5日　日本武神社の祭り（般若の十六様）
4月15・16日　小鹿神社の春祭り（小鹿野地区）
5月3日　木魂神社の祭り（津谷木のお天狗様）
10月1日　奈倉妙見宮の秋祭り（下小鹿野）
11月19・20日　小鹿野町郷土芸能祭（小鹿野文化センター主催）
12月10日・11日　八幡神社の祭り（上飯田の鉄砲祭り）

このうち、筆者が実際に足を運んだのは、春祭り・お天狗様・奈倉の女歌舞伎である。十六様は花粉症を理由に、また郷土芸能祭と鉄砲祭りは、本務の都合により、未経験であるが、その分は参考文献・収録ビデオ・写真集などの情報から、以下、暦の順に各祭りの特徴を紹介する。

6－1　般若の十六様

3月5日というと、秩父盆地はまだまだ厳しく冷え込む季節である。凍てつく残雪と寒気の中、焚き火に暖をとりながらの芝居見物が、十六様の風物とされてきた。この小さな村の鎮守様の祭りは、めったに観光客など来ることも無く、小鹿野歌舞伎の中で、地芝居本来の懐かしい味わいを最も色濃く感じさせる。歌舞伎の舞台は、古い神楽殿を改造したもので、祭りのたびに仮設の花道を組み立てる。楽屋は、裸電球で照らされた舞台下の狭くて薄暗い場所なのに、祭りの日には、役者も含めた耕地の人達が、囲炉裏を囲んで目刺しを焼きながら酒を酌み交わしている。モクモクと煙が立ち込める中、化粧して衣裳付けも半ばに酒を呑む人、うまそうにタバコをふかす若女形など、カメラマンには絶好の被写体にこと欠かない。

ただ、近年の暖冬の影響で、この村祭りの風情も少し変わりつつある。筆者は2005年のビデオを視聴したところ、開演前にはマスクをしている人が目立った。確認したわけではないが、花粉症のように見受けられる。この年は、『白浪五人男』が開幕すると雪が降り始めたため、旧

Hosei University Repository

来の祭りに近い季節感がただよったが、暖冬の影響は、この祭りの雰囲気を確実に変えつつある。

ビデオでは、『五人男』につづいて『寺子屋』の開幕となったが、大歌舞伎では決して見ることのできないチャリ場、よだれっくりが餅をつまみ食いする場面があり、いかにも村芝居ののんびりとした場面が展開していった。

言い訳になるが、秩父地方は、スギ花粉の本家本元である。情けない話だが、筆者はよほどのことが無い限り、この十六様に出かける勇気はない。

6-2　小鹿神社の春祭り

小鹿神社の例大祭は、春日町・上町・新原・腰之根の4町内の役人（やくびと）が町内ごとの祭り衣裳で参拝する「宮参り」に始まる。その後、粋な手古舞姿の女子中学生がつとめる金棒つきが先ぶれとなり、春日町屋台・上町屋台・新原笠鉾・腰之根笠鉾の豪華絢爛な4基が、秩父囃子をとどろかせながら、町内を若い衆たちに曳行されていく。祭りの2日間で、現在の小鹿神社と旧本殿の元宮との間を行き来するのである。4月も中旬ともなると、東京ではとうに散ってしまった桜が、小鹿野では満開に咲き誇っている。筆者が足を運んだ2005年の春祭りも、天候に恵まれ、大変美しい祭り風景となった。

歌舞伎上演は、15日の夜行なわれた。春日町屋台と上町屋台を商店街の2ヶ所に据え、それぞれ両芸座と花道を組み立てると、道幅いっぱいに広がる豪華絢爛な舞台ができあがる。舞台前の道路がシートの敷かれた見物席となり、観客は2つの舞台の競演に行き来して声援をおくる。写真6は、夜空に映える上町屋台。

写真6　夜空に浮かぶ上町屋台

この日は、上町屋台で、子供歌舞伎『寿曽我対面　工藤館の場』と上町若衆歌舞伎『妹背山婦女庭訓　三笠山御殿の場』が上演され、春日町屋台で、小鹿野歌舞伎保存会の『義経千本桜伏見稲荷鳥居前の場』が上演された。『対面』では、豪華な衣裳を身に着けた子供たちが嬉しそうで、「写真とってもいい？」と聞くと、得意げにこっくりうなずき、大人顔負けのカメラ目線になるのが愛らしかったし、若衆歌舞伎では、仲間内から本名や商売の屋号で掛け声がかかるのがいかにも楽しげだった。写真7は、商店シャッターの前で、ちょっとはにかむ小林朝比奈。

写真7　商店シャッターの前の小林朝比奈

この日歌舞伎がはねると、上町の指導者柴崎好一さん宅にお招ばれした。上町の若衆と義太夫の柴崎宇平さんのほか、小鹿野出身の画家小菅光夫さん、小鹿野を愛して止まない写真家丸山巌さん・山口清文さん、NPO日本伝統芸能振興会や小松市役所子供歌舞伎担当などの諸氏が、かるく20人は集まっていた。打ち上げ・反省会ということだったが、またしても美味い地酒と柴崎家のご馳走の誘惑に負けて、どんな話を聞いたのか、あまり覚えていない。

翌16日は、歌舞伎上演こそ無いものの、「お練

Hosei University Repository

り」（写真８）というイベントがあった。『寿曽我対面』の諸役に扮した町民が前日歌舞伎の行なわれた本通りを練り歩き、通りのあちらこちらで立ち止まり、五郎と十郎の型の見せ場を披露するのである（写真９）。通りの両側に縁日のような露店が出て、非常に賑やかである。写真10は、お練りに混じって小林朝比奈と酒を酌み交す丸山巌さん。

写真８　お練の行列

写真９　お練りの五郎・十郎

お練りの楽屋に使用されたのは、町の有形文化財にも指定されている加藤家住宅だった。生糸や呉服の商いで財を成した加藤恒吉により明治13年に建てられた、当時の豪商の息吹を今に伝える存在感のある建物である。秋父事件を題材にした映画『草の乱』の撮影にも使われたそ

写真10　小林朝比奈と酒を酌み交す丸山巌さん

写真11　化粧のデモ

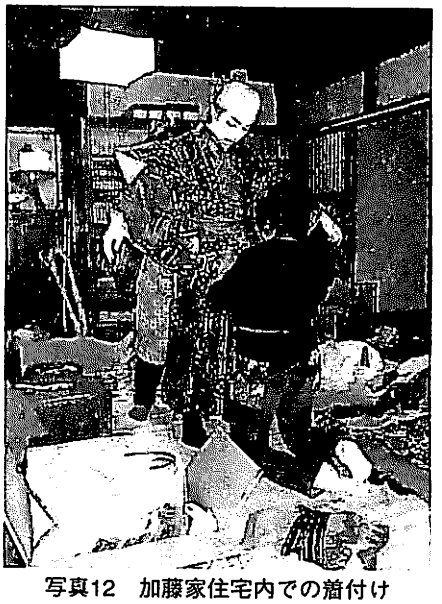

写真12　加藤家住宅内での着付け

Hosei University Repository

うだ。この家の前で、お練に出る人の化粧が行なわれ（写真11）、1階の座敷で衣裳・髪づけが行なわれた（写真12）。

筆者のようなお練りに参加しない人がジロジロ見ていても、いたって歓迎ムードである。それればかりか、このお練りには誰でも参加できるので、「どれか役になってくれませんか？」と言われた。実はちょっと心が動いたが、花魁が残ってなかったのでやめておいた。写真13は、加藤家住宅前の勢揃い。

写真13　加藤家住宅前の勢揃い

春祭りの終わりには、屋台・笠鉾が元宮（または神社）に曳きそろえられ、仕掛け花火が町並みを彩る。

6-3　津谷木のお天狗様

3月5日の十六様が春の始まりを告げる祭りなら、5月3日のお天狗様は、春の終わりの祭りである。かつては、この祭りが終わると、養蚕農家は晩秋まで仕事に追われることになっていた。津谷木地区の鎮守である木魂神社は、その通称「お天狗様」の名のとおり、いかにも天狗の出そうな神秘的なムードの山の頂上にある。2005年は、津谷木のお天狗様も、天候に恵まれた。すがすがしい5月の空気を肌で感じながら山頂への道を歩いた。連休中ということもあって、かなりの盛況で、近隣の町村からも見物に来る人が多い。この日、役場の山本正実さんから、秩父正和会の方々をご紹介いただいた。

舞台となるのは、瓦屋根の立派な神楽殿で、舞台下手には屋根つきの花道もある（写真14）。定式幕には、黒・柿・萌葱の縦縞模様の上に、

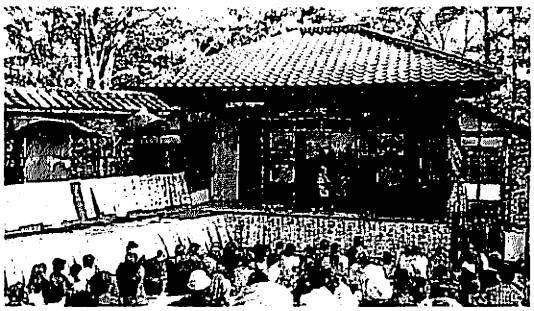

写真14　お天狗様の舞台

巨大な天狗の面が染め上げられている。この舞台から50坪ほどの空間をおいた斜面の少し上のところに木魂神社の本殿が建っていて、この神楽殿と本殿の間は、山の斜面を利用した自然の見物席となる。ゴザの上では、弁当や露店の軽食をひろげて、酒を酌み交わしている人も多い。午前中から来ていたというオーストラリア人の男性もいる。見るからに賑やかな雰囲気の中、午後1時から『菅原伝授手習鑑　寺子屋の場』と『恋女房染分手綱　重の井子別れの場』が上演された。

とくに『重の井子別れ』では、乳人重の井（小沢幸男さん）と馬方三吉（小沢早也香ちゃん）で、実の親子共演が見られたことが印象的であった（写真15）。この芝居は、良い子役がいないとできないのに、よく地芝居でここまで指導されたと思う。早也香ちゃんは、この後小鹿野子ども歌舞伎でもこの大役を見事に演じ、小松の全国子供歌舞伎フェスティバルや小鹿野文化センターの郷土芸能祭で喝采を浴びている。

写真15　小沢さん親子共演

Hosei University Repository

6－4　奈倉妙見宮の秋祭り

小鹿野歌舞伎の行事のうち、もっとも耕地の絆を強く感じる祭りである。筆者が現在のところ唯一２度通った祭りであるが、今思うと、2004年秋に、初めての地芝居取材でこの祭りを訪れたのは、無知であり無謀であった。初めて地芝居を見る場合には、なるべくその土地の大きなイベントで観光客を迎える体制のあるところから入り、それから少しずつ馴染んでいく方が楽である。

奈倉耕地は、わずか70戸あまりの小さな耕地で、共同体としての団結が強い。『奈倉文庫』という耕地の新聞を月１度発行しており、集会所に図書館を開設したり、運動会や文化祭も盛んに行なっている。秋祭りは、この耕地の最大の年中行事なのである。

十六様とお天狗様には、常設の歌舞伎舞台があり、小鹿神社と八幡神社の祭りには、屋台がある。ところがこの妙見宮には何の設備も無い。鉄パイプの骨組みとビニールシートの覆いの上に、小鹿野歌舞伎保存会から借用した舞台装置を組み立てて、掛舞台を設営する。

プログラムは実に盛りだくさんである。子どもたちの劇や合唱、大人の寸劇、婦人会や老人クラブの民踊、カラオケ大会など。女歌舞伎の上演はプログラム最後になるのだが、だいたいプログラム全体が時間どおりに進行しないし、子ども歌舞伎は、他の余興の谷間にやるので、女歌舞伎と子ども歌舞伎を両方見ようとすると、長時間全く歌舞伎と関係ない余興につきあわされることになる。ただ、その時間も、少し知り合いができてくると、再会を祝して酒を酌み交したり、近隣のいろいろな行事についての情報をもらえたりするので、楽しめるようになる。

奈倉の女歌舞伎は、昭和58年の秋祭りに発足した。藤昌平さんが、師匠であり創始者である。藤さんは、４代目坂東音十郎の名をもつ役者であり、以前は、小鹿野歌舞伎保存会の役員でもあった。この人の呼びかけに応じたのが、現在の女歌舞伎座長、田村静江さん（写真16）である。2004年には『義経千本桜　伏見稲荷鳥居前の場』を、2005年には『絵本太功記　十段目尼ヶ崎閑居の場』を上演している。芝居がはねると、田村さんの自宅で反省会だそうだ。

女歌舞伎にとって深刻なのは、後継者問題である。一つの解決策として、田村さんたちは、女の子のお孫さんたちに子ども歌舞伎をさせて、後生を育成する努力をつづけている。それが秋祭りのプログラムの『白浪五人男』である（写真17）。

写真16　田村さんの安倍宗任

写真17　楽屋の赤星十三郎

筆者がこの秋祭りで楽しみにしているのは、ハナ返しにもらえる耕地の人たち手作りの木版画カレンダーである。しかも、ハナを出すと、紙に名前と出した金額の10倍の数字を書いて貼ってくれる。祭りのハナ返しは、手ぬぐいやタバコ、缶ビールなどが一般的と聞いているが、奈倉耕地では、手作りの木版画で、表紙を入れて７枚刷りの大判カレンダーを配っている。年

Hosei University Repository

の初めに耕地中の家に版木が配られ、春の奈倉文化祭で作品が展示され、その中から選ばれた作品が、カレンダーに採用される。当初は手刷りだったカレンダーも人気のせいでコピー刷りになったが、一日の仕事を終えて集会所に集まっての夜の共同作業を思うと、贅沢は言えない。こういう作業に共同体として積極的に取り組む姿が、奈倉耕地の特徴なのだろう。

6-5　小鹿野町郷土芸能祭

昭和46年の第一回小鹿野町郷土芸能大会に始まり、2005年度で35回を数える郷土芸能祭。現在では、小鹿野文化センター主催の恒例行事である。筆者はまだ一度も訪れたことがないが、送っていただくプログラムを見ると、初日土曜日の午後から2日目日曜日の夕方まで、小鹿野歌舞伎保存会オールスター公演、年替りの各部会公演、小鹿野子ども歌舞伎、地元中高生による歌舞伎、また歌舞伎サークル「うぶ」による公演のほか、神楽、三番叟、秩父囃子など、小鹿野とその近隣の地域が発信するありとあらゆる伝統芸能が集結する場と考えてよさそうである。

会場となる文化センター大ホールには、子ども歌舞伎の舞台稽古で入ったことがあるが、舞台袖を有効に活用した花道のある立派なホールである。公共ホールづくりにも歌舞伎を意識しているところが、歌舞伎のまち小鹿野らしいところである。

また、この芸能祭2日目午後には、市街地の観光商業情報館「夢鹿蔵」でも、秩父囃子や子ども歌舞伎のお練りなどを見ることができる。

妙見宮の秋祭りのところでも述べたが、初めての土地で取材をするときは、こうした芸能祭から手をつけるのが一番能率が良かったかもしれない。ただし、そのとき土地の人の素顔がどこまで見えてくるかは疑問である。

6-6　上飯田の鉄砲祭り

八幡神社の例大祭は、小鹿野歌舞伎の暦の中で最も有名な祭りで、ハンターが鉄砲を撃ち鳴らす中、二頭の神馬が参道を駆け上がって神様を迎えに行く「お立ち」というハイライトから、鉄砲祭りと呼ばれている。ご神馬が無事に参道を駆け上れるかどうかは、新年の吉凶にかかわる大イベントであり、氏子にとっては正月よりも大きい行事なのである。1998年の祭りは、NHKの取材を受け、ハイビジョン番組『ときめき日本』で放送されている。「お立ち」のほかに「大名行列」や「屋台歌舞伎」の催しがあり、焚き火で暖をとりながらの歌舞伎見物や十六様と同じ「楽屋の目刺し」は、さぞかし郷愁を誘うものであろう。

番組中、この年の祭りでは、『絵本太功記　十段目尼ヶ崎閑居の場』が上演されることが紹介されていた。八幡神社の奉納歌舞伎には、演目上のタブーがある。八幡神社は、播磨から流れてきた平家の落ち武者による八幡信仰をルーツとするため、上飯田地区では、『義経千本桜』などの源氏ものは演じてはならないことになっている。そんなことは迷信だからと上演し、大雨が降ったとか、旗ざおが折れてけが人が出たとかの言い伝えが残っている。

7．小鹿野歌舞伎の演目

筆者が実際に小鹿野歌舞伎で見た演目は、『青砥稿花紅彩画　白浪五人男稲瀬川勢揃の場』、『寿曽我対面　工藤館の場』、『恋女房染分手綱　重の井子別れの場』、『義経千本桜　伏見稲荷鳥居前の場』、『菅原伝授手習鑑　寺子屋の場』、『絵本太功記　十段目尼ヶ崎閑居の場』、『妹背山婦女庭訓　春日山御殿の場』の7本であるが、ほかにも『奥州安達原三段目　袖萩祭文の場』、『鬼一法眼三略巻　一條大蔵譚の場』、『一谷嫩軍記熊谷陣屋の場』などの時代物をレパートリーとしている。

時代物を主とするのは、だいたいどこの地芝居にも共通するところであるが、理由としては、歴史上のヒーローへの憧れや、華やかな衣裳や化粧による変身願望の充足、義太夫語りに助けられての台詞負担の軽さなどが、都会の町人の生活を写実的に描いた世話物と比べて親しみやすかったということが、よく言われるところである。

Hosei University Repository

8．他地域との交流

小鹿野歌舞伎は、「町の文化使節」として、出張公演にも熱心に取り組んでいる。平成2年度から始まった「地域間文化交流事業」である。全国50ヶ所で公演し、町のイメージアップに大きく貢献している。

たとえば、ここ最近では、江戸東京博物館の「地芝居シアター」、「地域伝統芸能全国フェスティバルやまがた」や「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」などへの参加が挙げられる。

筆者は、このうち2005年の「第7回全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」を追いかけた。この年は、小鹿野と小松のほか、岐阜県垂井町の子ども歌舞伎が参加した。

小松の子供歌舞伎フェスティバルは、歴史ある「お旅まつり」のイベントである。城下町小松発展の基礎を築いたのは、宗教・美術・芸能に造詣の深かった、加賀3代藩主前田利常であるが、利常死後も、彼が勧業した加賀絹が、この町の経済力を大きく支えることになる。「お旅まつり」の名前は、氏子の住む町内から、利常が城主である小松城まで、神輿が練り歩くように「お旅」をすることに由来すると言われている。現在では、材木町・西町・大文字町・京町・八日市町・寺町・龍助町・中町の八町の曳山が市役所前広場に勢揃いして（写真18）、そのうち年ごとの当番町が子供歌舞伎を上演する。曳山子供歌舞伎の出演者には、当番町に在住、またはゆかりのある小学生が選ばれる。最近の指導者は、函館を拠点に活躍する歌舞伎役者の市川団四郎さんなど。

写真18　市役所前の曳山

2005年の「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」は、5月14日・15日に行なわれ、曳山八基曳き揃え・お練りが14日に、花道のある公共ホール「こまつ芸術劇場うらら大ホール」での垂井町・小鹿野・小松による子供歌舞伎競演が14日・15日の2日間にわたって行なわれた。演目は、垂井町が『奥州安達原　環宮明御殿の場』、小鹿野が『恋女房染分手綱　重の井子別れの場』、小松が『歌舞伎十八番の内　勧進帳』であった。むろん、この『勧進帳』は、名勝「安宅の関」にちなんだ演目であり、各町の曳山子供歌舞伎とは違って、小松市内の小学6年生対象の公募オーディションで出演者を決定し、地元の元小学校長北野勝彦さんが、子供歌舞伎『勧進帳』上演の会会長として、指導にあたっている。子供歌舞伎とはいえ、フェスティバル開催にあたって市川団十郎家に挨拶を行ない、2005年度は団十郎丈も当日激励・指導のため当地まで足を運ばれたという華々しいイベントである（写真19）。

写真19　小松子供歌舞伎の『勧進帳』

小鹿野の『重の井子別れの場』は、前述のお天狗様の出し物でもあり、お天狗様ではお父さんの重の井で三吉を演じた小学4年生の小沢早也香ちゃんが中学2年生の富田昌樹くんの重の井でも大熱演だった。富田くんのほうは、そろそろ子ども歌舞伎を引退する年齢だが、大人の歌舞伎顔負けの名女形である。写真20は、小鹿野文化センター大ホールでの舞台稽古。写真21は、同舞台稽古で、小沢幸男さんが娘の早也香ちゃんの花道の出を指導しているところ。

また逆に、出張公演ではなく、地元とその周

Hosei University Repository

写真20　小鹿野子ども歌舞伎の『重の井子別れ』練習風景

写真21　小沢さん親子の練習風景

辺に他地域の人々を招く企画も行なっている。文化センター主催の郷土芸能祭はまさにその代表的なイベントであり、そのほかにも2005年2月に彩の国さいたま芸術劇場大ホールで秩父正和会と合同で行なった「彩の国の地芝居―秩父・小鹿野の歌舞伎―」などがある。

さらに、大きなイベントではなくとも、勉強会など、地芝居同士の協力関係も大切な活動である。筆者はまだ、小鹿野が主催する勉強会に参加したことはないが、秩父正和会の勉強会を2度ほど見学させていただいた。1回目は、秋川歌舞伎あきるの座が『白浪五人男』を習いに来ていたし（写真22）、2回目は、地芝居研究で高名な景山正隆先生を招いての『鮨屋』の本読みに、小鹿野の柴崎宇平太夫が勉強に来ていた。

写真22　秩父正和会と秋川歌舞伎あきるの座の勉強会

9．行政の支援体制

名実ともに「歌舞伎のまち小鹿野」であるが、行政は小鹿野歌舞伎にどのような支援を行なっているのだろうか？専門調査員の山本正実さんに伺った。

小鹿野文化センターの基本的姿勢は、歌舞伎を中心としたまちづくりの「窓口」であるということ。つまり、あくまで主体は各地区の氏子集団であり、行政は資金的にも企画提案の面でも、ほとんど大きな介入はしない方針である。資金面では、前述の5つの地区・子ども歌舞伎・小鹿野歌舞伎保存会のそれぞれに年間63,000円ずつ（平成17年度）を補助するのみで、企画面では、11月の郷土芸能祭が、唯一文化センター主催の恒例行事である。したがって、祭りのハナは各地区の歌舞伎上演に大いに役に立っている。一口3,000円～5,000円のハナも、一回の祭りで合計50万円程度になれば、そこから衣裳・鬘代、義太夫さんや師匠への謝礼を支払うことができる。

小鹿野町の行政のこうした方針は、小松市のそれとは好対照である。小松市では、フェスティバル開催事業費としてフェスティバル実行委員会へ2,300万円、子供歌舞伎『勧進帳』上演事業費として『勧進帳』実行委員会へ400万円を支出するほか、お旅まつり開催事業費として2,600万円を、上演町への補助、各種広報費、当番町

Hosei University Repository

以外の町への補助、曳き揃えの補助などに充当しており（平成18年度）、行政がトップダウン的に子供歌舞伎の全体を統率している印象を受ける。

ところで、拙稿にもすでに再三お名前を挙げている山本正実さんとはいったい何者なのか？すれ違った土地の消防団員が、「歌舞伎のあるところ、山本先生の姿ありですな」と声をかける。あるときは、パリッとした背広姿の地方公務員、またあるときは、小鹿野歌舞伎の半纏をまとったマネージャー、さらに、黒衣や狂言作者まで演じてしまう、八面六臂の活躍である。いまや小鹿野歌舞伎には無くてはならない存在であるが、もともとは1982年に、当時設立予定だった小鹿野町歴史民俗資料館の学芸員に応募してこの町に来たのだが、町の事情で歴史民俗資料館の設立が取りやめになり、小鹿野歌舞伎支援を担当するに至ったそうだ。さすが歌舞伎のまち小鹿野、歌舞伎専門の公務員を採用したのかと思ったらそうではなかった。東京都出身、学習院大学史学科卒業である。いわゆるよそ者でありながら、努力と人柄でこの土地の人々に信頼され、筆者の小鹿野歌舞伎調査も、この人なくしては始まらなかったと言える。ちなみに、本当に「歌舞伎公務員」が存在するのは、岡山県奈義町だけだそうだ。

前述の歌舞伎サークル「うぶ」の発端をつくったのも、山本さんである。小鹿野歌舞伎の各部会は氏子でなければ入れないので、一般市民にとって歌舞伎は必ずしも身近な存在ではなかった。そこで市民講座として、平成７年度に「歌舞伎入門教室」を開始し、演技体験学習により、一般市民の歌舞伎理解を促進することに成果を上げてきた。一方、平成６年に開始された「歌舞伎伝承教室」は、裏方の後継者育成を主旨として、太夫・下座音楽・化粧など各部門のわざの伝承を目指してきた。「うぶの会」は、これら市民講座の卒業生がつくったサークルである。写真23は、春祭りのお練りで柝を打つ山本さん。

行政は氏子の「小鹿野歌舞伎」に大きな介入はしない方針とのことだが、町全体を見渡してのバランスの良い援助がなされていて、歌舞伎をめぐって、氏子とも一般市民とも円満な協力体制がとれていることが窺われる。

写真23　柝をうつ山本さん

10. 小鹿野歌舞伎の後継者たち

春祭りの晩に柴崎好一さん宅の打ち上げに招ばれたことを書いたが、このとき来ていたのが上町の若衆歌舞伎の面々だった。それまでは、「いまどきの20歳代の男性が地芝居などに出るのは、きっと地元おこしの義務感に違いない」と勝手に思い込んでいたのであるが、その日の舞台の話を肴に盛り上がっている様子は、芯から楽しげで、筆者は詳しい話を聞いてみたかったが、圧倒されて、とても入っていける雰囲気ではなかった。

そのように、一度仲間になってしまえば、楽しいこともいろいろあり、盛り上がるのだろうが、やはり入り口では、さまざまな努力がなされているようだ。

たとえば、地元の青年が社会人になると、大抵は地域社会のつきあいとして、消防団に入る。消防団に入っていないと、どこか仲間じゃない感じになるそうだ。そこへ小鹿野歌舞伎保存会が勧誘を行ない、新メンバーを獲得するわけだ。

また、奈倉の女歌舞伎だと、当初のメンバーも60歳代の後半を迎え、存続の危機意識を抱くようになった。女歌舞伎の役者が、自分の孫を『白浪五人男』に入れて、女歌舞伎の前座に上演

Hosei University Repository

するのは、そうした危機意識から出た後継者養成の企画である。

少子化の影響は、小鹿野も例外ではない。子ども歌舞伎は、小学校3年生～中学2年生までの子どもたちによるものだが、柴崎好一さんが昭和62年に子ども歌舞伎を再開した当初は、上二丁目が中心だった一座が、徐々に各地混成になってきたという。

一つの地域で、男歌舞伎・女歌舞伎・子ども歌舞伎のすべてを網羅するところは、珍しい。将来いずれも欠くことの無いよう、存続・発展してくれることを祈念してやまない。写真24は、春祭りのお練りで人寄せをする柴崎好一さん。

写真24　拡声器をにぎる柴崎好一さん

11. 小鹿野歌舞伎の特色

これまで述べてきた小鹿野歌舞伎の特色をまとめると、以下の5点に集約される。

1）「歌舞伎を中心としたまちづくり」のもとに、町内5地域と行政の協力体制が充実している。
2）4つの部会の群雄割拠状態を基盤として、小鹿野歌舞伎保存会というオールスター組織が存在する。
3）男歌舞伎・女歌舞伎・子ども歌舞伎を網羅している。
4）大和座以来の有形・無形の財産が豊富で、役者・裏方・義太夫など、すべてを町民で賄える。
5）つい通ってしまう温かい土地柄。

最後に、小鹿野歌舞伎保存会について若干の補足を行なっておきたい。秩父正和会の稽古を見学させていただいたときに、このようなことばを聞いた。「うちは、小鹿野と違って素人だから、定期的に稽古しないといけないんです。」筆者は、しばらくこの意味がよくわからずにいたが、山本さんに尋ねると次のようなことらしい。

小鹿野歌舞伎は、5つの各地域に指導者がいて、それぞれ特定の演目の役の経験者もいる。小鹿野歌舞伎保存会の公演は、このうち4地域のうまい人達が集まって演ずるオールスター公演なので、断然有利だという。その点、正和会で何かの演目をやることになると、ゼロからの出発である可能性が高く、定期的な稽古なしには、公演が成り立たない。氏子による組織ということで、参加者の枠に規制がある反面、小鹿野にはそうした強みがある。

地芝居は、奥が深い。筆者はこれまで、地芝居を、大歌舞伎—小芝居—地芝居という位置づけの中でしか把握していなかったが、実際に現地に足を踏み入れてみると、その土地の風土や地域共同体のあり方と密接な関わりがあり、興味は尽きることがない。きっと、今後は、国内の出張や旅行のたびに、その土地に根ざした郷土芸能に触れることが、大きな楽しみになることは間違いない。

謝　辞

本稿をまとめるにあたって、小鹿野町文化センター専門調査員の山本正実さんに、広くご教示をいただきました。また、写真家の丸山巌さんには、研究発表や授業のためにと、たくさんの美しい作品を提供していただきました。上町の指導者柴崎好一さん、義太夫の柴崎宇平さん、画家の小菅光夫さん、写真家で朝日新聞社友の山口清文さん、須崎旅館の女将須崎真紀子さん、とても書きつくせませんが、小鹿野町で出会った多くの方々に温かく迎えていただきました。心より御礼申し上げます。

また、小松の子供歌舞伎に関しては、小松市役所

Hosei University Repository

企画課の竹田佳織さんから予算や指導者について情報をいただきました。御礼申し上げます。

掲載写真

本稿の掲載写真は、写真1が畠山一男さんからのご提供、写真16が田村静江さんからのご提供、その他はすべて筆者が撮影したものです。

参考文献

井上勝之助監修『図説秩父の歴史』（郷土出版社、2001年）
小鹿野歌舞伎後援会『小鹿野歌舞伎後援会報　品屓』創刊号−5号（小鹿野歌舞伎後援会、2000年−2004年）
小鹿野町教育委員会『彩の国県民芸術文化祭2003歌舞伎・郷土芸能祭プログラム』（小鹿野町教育委員会、2003年）
小鹿野町教育委員会『埼玉県民芸術文化祭2004歌舞伎・郷土芸能祭プログラム』（小鹿野町教育委員会、2004年）
小鹿野町誌編集委員会『小鹿野町誌』（小鹿野町、1976年）
小鹿野町役場秘書企画課『あかまんま双書3巻　小鹿野歌舞伎一幕千夜』（小鹿野町、1995年）
畏山正隆『愛すべき小屋—村芝居と舞台の民俗誌』（冬樹社、1990年）
郡司正勝『地芝居と民俗』（岩崎美術社、1971年）
小菅光夫『小鹿野歌舞伎の魅力—秩父の地芝居』（まつやま書房、1993年）
『サライ』編集部＋明石和美『全国「芝居小屋」巡り』（小学館、1995年）
「全国子供歌舞伎フェスティバルin小松」実行委員会『第7回全国子供歌舞伎フェスティバルin小松プログラム』（「全国子供歌舞伎フェスティバルin小松」実行委員会、2005年）
日本交通公社編集室『観光文化170号』（日本交通公社、2005年）
丸山巌『（丸山巌写真集）旬彩歌舞伎祭文—秩父・小鹿野の地芝居100花撰—』（東京印書館、2004年）
守屋毅『村芝居—近世文化史の裾野から—』（平凡社、1988年）
龍助町曳山事務所『お旅まつり奉納曳山子供歌舞伎プログラム　義経千本桜吉野山道行の場』（龍助町曳山事務所、2005年）